保育者のマスク着用が、子どもとのコミュニケーションに及ぼす影響について

A Study on the Effect of Caregivers' Wearing Masks on Communication with Children

下里 里枝*

Satoe SHIMOZATO

抄　録

人間の赤ちゃんは未熟な状態で生まれてくる。哺乳動物の多くは、出生直後に立ったり、歩いたりできるが、人間は約１年経たないと歩くことができない。生後３年間は、成長する上で心身ともにめざましい発達をとげる重要な時期である。

保育所保育指針第２章保育の内容の乳児保育に関わる基本的事項に、「乳児期の発達については、視覚、聴覚などの感覚や座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通して、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。これらの発達の特徴を踏まえて乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。（以下略）」と記載されている。

新型コロナウイルス禍の就学前教育・保育施設で、感染予防対策として保育者のマスク着用を求められるようになって２年以上過ぎた。感染予防のマスクは重要であるが、筆者は初対面がマスク姿の学生は顔と名前が覚えにくい。大人だけでなく子どもはマスク姿の保育者をどのように感じているのだろう。子どもの対人関係能力を含む様々な発達への影響はないのだろうか。

本大学の系列園の保育者のアンケート回答から、保育者のマスク着用は、表情や口元がマスクで隠れているので、子どもとのコミュニケーションに困難をきたしていることが明らかになった。今後の対策として、保育者が子どもとのコミュニケーションに工夫を凝らすことが求められている。

Ⅰ　はじめに

就学前教育・保育施設において、新型コロナウイルス感染症対策が重要であることは当然である。「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック第２版（2020.10）」[1)] には、詳細な感染拡大予防対策が記載されている。その中で、新型コロナウイルスが拡散しないために保育者のマスクの着用が推奨されている。つけ方も鼻と口、あごまできちんと覆う。と指示されている。しかし、乳幼児教育・保育施設は、感染予防は重要であるが、子どもの心身の発達のための保育活動を実施する場であり、保育者がマスクで口元を覆うことは、子どもの発達に影響がないのだろうか、あるならどのような影響があるのかを考えておく必要があるのではないかと筆者は考えている。

乳幼児期は、養育者（保育者も含む）に抱っこされ、ミルクをもらったり、食事の介助をされたり、微笑みを向けられたり、言葉をかけてもらったりという、毎日繰り返し行われる関わりが不可欠である。その時に、マスクで保育者の顔半分が隠れていて、口元が隠れていて、声も届きにくかったら子どもは何を感じるのだろうか。保育者に愛着を持てるのだろうか。本研究ではコロナ対応をしながらの保育のあり方を考察する。

＊　関西国際大学教育学部　教育総合研究所学内研究員

Ⅱ　研究方法

１．調査対象

関西国際大学の系列の幼稚園１園、保育所３園に訪問し、保育者にアンケートの依頼をした。アンケートは任意であり、自由記述の回答とした。対象者 70 人中、63 人の方から回答をいただいた。

２．手続き

保育者のマスク着用が長期化しており、保育場面において、子どもとのコミュニケーションや発達に影響がないかを検討し、今後に活かすことを口頭で説明して質問紙を配布した。内容については、保育者や子どもが特定されることはないこと、不利益を被ることはないこと、回答用紙は研究後破棄すること、。研究結果は報告し、大学の研究叢書に投稿することを伝えた。

Ⅲ　結果

アンケートの記述を筆者が内容別に整理して以下に示す。

１．子どもが保育者の声が聞き取りにくい様子があるか。

（1）【聞こえていないのでは？と心配】

・子どもの名前を呼んでも、どの保育者が呼んでいるのかわからずキョロキョロしていることがある。

・子どもは口元を見て聞き取っているようだったので、マスク着用をしていると伝わりにくさを感じる。

・周りが雑音だらけの時、保育者の声が子ども達に届いていないような様子が見られる時がある。

・マスクをしていると、保育者の声が大きくなりすぎて不快に感じている子どもがいた。

・マスク着用前と比べると、会話時に聞き返されることが多くなった。

・多人数の場や、少し離れた場面から声をかけると聞こえていないのではないかと心配になる。

・歌を歌う時、歌詞が聞き取れていないようで、曖昧に歌うことがある。

・表情、声量で、自分で思っているほど伝わっているのかと感じることがある。

（2）【保育者の工夫】

・目と目を合わせて個別に声掛けする事が増えたように思う。

（3）【特にない】

・声が聞こえていない様子を感じたことはない。

２．食事指導において保育者のマスク着用が、妨げになっていないか。

（1）【噛んで食べている？】

・「あーんして」とマスク越しに子どもに言っても伝わらない。

・「モグモグ」「パクパク」等を噛むことを言葉で伝えてもわかりづらい。

・食べ物を奥歯で噛むことや口を動かす動作が伝えにくい。

・嚥下が苦手な子どもに（前歯で噛んでいる）奥に食べ物を動かしていくことをマスク越しで伝えるてもわかりづらそうにしており、指導の難しさを感じる。

（2）【食事の楽しさは？】

・(感染防止のため) 保育者が子どもと一緒に給食を食べていないので、給食の楽しさを十分に感じることでができていないのではないかと思う。

（3）【特に問題はない】

・あまり妨げになっているとは思えない。むしろ衛生的には良い
・黙食は食事に集中できるのでは？

３．保育者のマスク着用が不便だと感じたことはあるか。

（1）【遊びの場面】
・ままごと遊びの時、大きな口をあけて食べる真似のできない事が不便。
・表情の変化を楽しむ「にらめっこ」などの遊びができない。

（2）【保育者の表情が伝わりにくい】
・子どもに保育者がどのような表情をしているのかわかりづらい時がある。
・表情が半分隠れているので、子ども達に思いや指示を伝えることが大変だと感じている。表情は子ども達に思いを伝える部分で大きな役割を担っていることを改めて感じた。
・目や眉毛だけで表情を伝えるのが難しい。
・保育者の表情をしっかり伝えたい時はマスクをずらして見せることもある。
・顔に目がないと子どもは不安になると聞いたことがある。口も同じで表情を窺ったり、言葉の発音にも影響を与える大きな役割を持っていると思う。保育者から褒められた時、注意喚起を受けた時、笑い合う時等、、子どもがその時に理解するのに、声と表情（聴覚と視覚）であったものが、マスク着用で声だけになり、子どもが理解する時間がやや多くかかっているように思う。マスク着用でジェスチャーが今までよりももっと大事になってくると思う。

（3）【保育者の声量】
・声をはらないといけない時、マスクは不便。
・元々声が通りにくい声質なので、マスク着用でさらに声が通りにくいと感じる。
・歌指導や運動遊びの際、声が聞こえにくく、更に声を出さないといけない。

（4）【保育者の顔がわからない？】
・子どもが保育士の顔をよく知らないのか、マスクをはずした時にすごく見てくる。

（5）【保育者の体調】
・一日中マスクをしているので、時々耳が痛くなり、息苦しいと感じる。
・夏の暑い時期は、熱もこもる感じがあり、呼吸もしにくく、熱中症も気になった。
・毎日不便だと感じている。息がしづらいので酸欠状態になり頭痛がひどい。
・暑いし息苦しい。走ったり、歌ったりは特に苦しい。
・子どもと一緒に運動や鬼ごっこをする時は、息苦しく疲れやすい。

4. 保育者のマスク着用が長期化することについてどう思うか。

（1）【乳児の場合】
・0 歳児は、入園当初から保育者がマスクを着用していて、保育者の顔が認識できにくいので、マスクを外すとまず驚いた顔をしてしまう。泣き出す子どももいる。
・マスクの顔が保育者の顔認証になっているのはどうだろうか。
・保育者の細やかな表情の変化等は伝わりにくいと思う。
・乳児はこの 2 年間、保育者のマスク姿しか知らない。複雑な気持ち。

・これから言葉を覚えていく乳児は、口の動きを見て覚えるのでマスクをしていてはそれができない。

（2）【発達への不安】

①言葉

・子どもが大人の口元を見ないことが、この先子どもの発達に何か良くない影響がでるように感じる。

・絵本を読む時、歌を歌う時、会話から、保育者の口の動かしている様子がわからないので言葉の発達が心配。

・言葉の発音にも影響を与えると思う。

②表情とコミュニケーション

・マスク着用は、保育者の顔が半分かくれることになり、ずっと壁を隔てているような気持ち。

・「マスク有り」の顔が子どもにとって普通になると子どもの感受性の発達等に対して不安を感じる。

・表情を見て、笑っている、喜んでいる、悲しんでいると言った姿を読み取る力が乏しくなるのではないか。

・表情が読み取り辛い分、目元だけでなく、声やその場の空気感、ジェスチャー等、様々な方法で感情を表現していく必要があるのではないか。

・顔、表情の理解が遅れるのではないか。

・保育者の表情が伝わらないことが一番の問題だと思う。表情の読み取りができない子どもが増えていくのではないかと心配。子ども同士もお互いの表情が見えず、気持ちの理解に影響していると思う。

・笑顔が見えにくく、ほめられた時の喜びが少ない。

（3）愛着関係

・大人の顔の目の部分しか見えていないのは表情がわかりにくく、子どもとの愛着関係や信頼関係ができるのに時間がかかると感じる。

・表情が見えないことで、意思疎通が困難である。情緒面で不安に思う。

（4）【感染予防のために仕方がないのか】

・子どもに感染させないために、現状では仕方がない。

・保育者のマスク着用が子どもの発達に影響を及ぼすとは思えない。

・健康面や衛生面を考えると悪くはない。

・子どもの風邪や下痢などの感染症のり患率が減った様に感じる。

（5）【対策】

・透明のマスクであれば子どもが保育者の口元が見えるので今よりは改善されるのでは。

・マスクの種類で、口元に空間ができる立体形状のマスクであれば聞き取りやすいのではないか。

・「目は口ほどに物を言う」のことわざがある。コロナ禍で新しい生活スタイルが生まれた様に、保育者自身にも新しいスタイル？での実践ができればいい。

（6）【マスクなしで保育したい】

・大切な話をする時には一時的にマスクを外したいと思う。

・マスクなしで保育をしたい。子どもに保育者の表情を見せることは大切だと思う。

・表情が見えないということがどのような影響を及ぼすのか心配である。小さい声ながらようやく自分のことを話そうとする子どもに何度も聞き返すことができないので、早くマスクを外すことができるよう願っている。

Ⅳ　考察

「子どもの名前を呼んでも、どの保育者が呼んでいるのかわからずキョロキョロしていることがある」という回答は、筆者自身もその経験がある。マスクなしの顔を知っている学生はマスクをしていても何とか識別できるが、マスク姿が初対面であれば覚えるのに時間がかかる。子どもはマスクで口元が隠れている保育者が自分の名前を呼んでも、目元で判断するしかない。子どもは保育者の表情や口元を見て、声を聞きながら相手のことを理解していることが伺える。明和[2)]（2021）は「1歳児ころになると、相手の目よりも口元をよく見るようになります。口の動きという視覚　情報と相手の口から発せられる音情報を結び付けて学習しているからです」と述べている。保育者が「目と目を合わせて個別に声掛けする事が増えたように思う」と回答されているのは、子どもを、遠くから呼んだり、周囲がざわついている中で呼んだりしないで、子どもの傍に言って一人一人丁寧に声掛けをされ、このコロナ禍でも保育者が子どもを大切にした保育をされていることが推察された。

乳児の食事指導はマスク越しでは難しいことがわかる。「「モグモグ」「パクパク」等と噛むことを言葉で伝えてもわかりづらい」「食べ物を奥歯で噛むことや口を動かす動作が伝えにくい」という回答は、乳児担当の保育者の悩みである。保育者が手のひらを開閉して動かしてモグモグを知らせたり、黙ってマスクを外して口を動かして見せたりされたこともあるとお聞きした。また、口元が見える透明のマスクをいろいろ探してつけておられる園もあった。筆者も保育現場で、モグモグ噛めない。噛まずに飲み込んでいる。逆にゴックンと呑み込めずいつまでも食べ物が口に残っている。などの子どもを試行錯誤して指導してきたが、乳児の食事指導は家庭との連携も必要であるが難しい。まして、マスク越しでの指導は苦労されていると思う。

最近、乳幼児期の口腔機能を高めることが健康にも大切であることが言われている。藤原[3)]（2022）は「乳幼児期の口腔ケアが生涯の健康を左右する。虫歯予防では、歯磨きよりも唾液の分泌です。また、生涯の健康な体と歯のためには、乳幼児期からの歯並びにも注目です。唾液の分泌を促進させ、歯並びにも良い影響を与えるために、食事の見直しから始めてみましょう」と述べている。また、唾液には、たくさんの効能があるようで、―①口腔内の清潔を促しウイルスや細菌が体の中に侵入するのを防ぐ、②よく噛むことで脳の働きが活発になる、③味を感じとる未蕾細胞が唾液に触れていることで味を感じやすくなる、④唾液に含まれる酵素には発がん作用を抑える働きがあるようでがん予防になる―と示している。今回のアンケートで、乳児に噛むことを伝えるのが難しいと多数回答されていたが、子どもの生涯の健康に結びつく大切な保育者の役割であるので、今後の食事指導の改善を期待したい。

遊びの場面で「ままごと遊びの時、大きな口をあけて食べる真似のできない事が不便」「表情の変化を楽しむ“にらめっこ”などの遊びができない」という内容があった。本当にそうだ。子どもにはままごとは再現遊びで発達には欠かせない遊びである。真似っこをすることが大切で、「おいしいね」といいながら子どもの作ったごちそうを食べ物に見立てて、一緒に食べる。この活動が子どもの創造性や言葉、人間関係を発達させる。子ども同士もお互いの表情が見えず、気持ちの理解に影響していると心配されている保育者もいた。マスク越しでも保育者の思いっきりのおいしい表情や、楽しい言葉かけを演じてほしい。友達とのコミュニケーションを楽しませてほしい。

明和[4)]（2012）「ヒトは生後2年間のうち、他の動物とは明確に異なる他者理解、コミュニケーション能力を発達させます。言語に先立ち、こうした社会的能力がかなり早期から発達してくるのです。（中略）言語とは音声によるものだけではありません。ヒトは音声だけでなく、表情や目線など、身体の動きから構成された身振りを含めて他者とのコミュニケーションするのが自然です。（以下略）」と述べていた。マスク越しではあるが、色々な方法でコミュニケーションの楽しさを伝えるための工夫を保育者に求めたい。

気になるのは保育者の体調である。「一日中マスクをしているので、時々耳が痛くなり、息苦しいと感じる」「夏の暑い時期は、熱もこもる感じがあり、呼吸もしにくく、熱中症も気になった」「毎日不便だと感じている。息がしづらいので酸欠状態になり頭痛がひどい」「暑いし息苦しい。走ったり、歌ったりは特に苦しい」と回答された方がいた。筆者自身もマスク着用の生活には慣れない。メガネが曇ったり、肌が荒れたりする。一日子どもと一緒の保育者にとって、マスクを外すタイミングは難しいかもしれないが、感染リスクを避けられるなら時間や場所を選んで、マスクを一瞬外すことも必要かもしれない。

「乳児はこの2年間、保育者のマスク姿しか知らない。複雑な気持ち」という回答は全くその通りである。保育現場で、マスクをはずすと泣き出す赤ちゃんがいると聞いた。保育者の顔の一部がマスクなっており、マスクを外すすと、違和感があったんだろう。何とも言えない辛い状況である。

明和[5]（2021）は「マスク着用の生活が長期化する中で,この生活が始まった時期に生まれた子どもは、もう1歳を迎えます.。脳発達の点において乳幼児期の1年はとても大きな意味を持ちます」と、マスクが長期化することへの危機感を訴えている。

マスク越しの保育者の表情理解についても心配している回答があった。「表情が見えないことで、意思疎通が困難である。情緒面で不安に思う」「“マスク有り顔”が子どもにとって普通になると、子どもの感受性の発達等に対して不安を感じる」「表情を見て、笑っている、喜んでいる、悲しんでいると言った姿を読み取る力が乏しくなるのではないか」「子どもが大人の口元を見ないことが、この先子どもの発達に何か良くない影響がでるように感じる」「絵本を読む時、歌を歌う時、会話から、保育者の口の動かしている様子がわからないので言葉の発達が心配」と言語発達の面でも保育者は危惧している。それについて、川田[6]（2020）は「乳児は極端に表情に乏しい顔に出会うと動揺し、困惑し、不快な声を上げたり、悲しい顔をし、ついには泣き出す。（中略）人間の表情は、とりわけ口元に現れる。つまり、人間は目元と口元に現れる表情筋の動きを総合して相手の感情を判断している。（中略）人間においては表情からの情報価が非常に高いと言える。（中略）生後10か月頃までは、音声と口の動きを結合して言語理解を発達させます」と述べている。保育者が心配しているように、発達上、深刻な状況であることが想像できる。

保育者が長期間マスクを着用していると、いくら目力でといっても限界があり、表情が乏しく表情筋が衰える可能性がある。目が口ほどのモノを言うと言われるが、それは、口が見えていてのことで、目だけでは難しいだろう。筆者は保育実習に行く学生に「目力で、マスクの下でも口角を上げて、笑顔で子どもと触れ合ってきなさい」と指導したが、難しい提案だったと反省した。ただでさえ、実習で緊張しているのに、表情筋まで意識はいかなかっただろう。

アンケートの中で、特筆すべきとても前向きな回答があった。「子どもが表情が読み取り辛い分、目元だけでなく、声やその場の空気感、ジェスチャー等、様々な方法で感情を表現していく必要があるのではないか」まさにその通りで、今後の保育のあり方を示唆するものであると感心した。明和も[7]「言語がもつコミュニケーション機能、そして社会的知性仮説に着目すると、ヒトは音声言語に先だち、体の動きを体系化した身ぶり手ぶり、表情によるコミュニケーションによって進化適応してきたのではないかと考えることができます。」と述べている。また、明和[8]は「ヒトが他者の身体と連続してつながることで、ヒト特有の心を発達させていく点はたいへん重要です。発達初期のヒトの脳は、他者と身体を触れ合わせる心地良さと同時に、目を見つめ、声を聞き、匂いを感じる経験を同時に受けて学習を効果的に進めるようにつくられています。」と述べている。子どもとは偉大であると思う。保育者がマスク着用をしていても工夫次第で、子どもとの関わりが豊かであればしっかりと発達することが期待できる。

Ⅴ　今後に向けて

2021年5月5日付 東京新聞によると、「フランス政府は、昨年9月から、子ども達の発達へのリスクを考慮し、飛沫を十分カットできる性能をもった透明マスクを、保育・教育施設に一斉配布した。」伊藤さんは今年3月の参院予算委員会で、実物を見せて活用を提案した。田村厚生労働相は、「１つの方法だと思う。研究させていただきたい」と応じた。是非、保育現場で使える透明マスクを開発してほしい。

さて、2021年12月に入り、新型コロナウイルスが収束したかに見えたが、、新種のオミクロン株が感染拡大してきている。感染予防のために保育者のマスク着用はまだまだ続くことが予想されるが、筆者は次の保育者の回答を心強く感じた。「コロナ禍で新しい生活スタイルが生まれた様に、保育者自身にも新しいスタイル？での実践ができればいい」

子どもが生涯にわたる人間形成を育む重要な時期に、子どもを預かる乳幼児教育・保育施設は、今まで以上に責任のある役割を担うこととなる。感染症との共存の時代を、保育者と共に模索して行きたい。

＜引用文献・参考文献＞

1) 全国保育園保健師看護師連絡会発行
「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック第2版（2020.10)」P9～10

2)「エデュカーレ」　汐見稔幸編集　臨床育児・保育研究会発行　P32　2021年5月号

3)「保育ナビ」　フレーベル館　P12～17　2022年1月号

4)　明和政子著「まねが育むヒトの心」　岩波ジュニア新書　P181～183　2012年

5)「エデュカーレ」　汐見稔幸編集　臨床育児・保育研究会発行　P34　2021年5月号

6)「保育問題研究」　全国保育問題研究協議会編集委員会　P23　306号　2020，12

7) 明和政子著「まねが育むヒトの心」　岩波ジュニア新書　P186　2012年

8) 明和政子著「ヒトの発達の謎を解く」　ちくま新書　P106　2021年

高内正子著「新胎児期から2歳まで　乳児保育への招待」　北大路書房　2017

西館有紗著「マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識」
富山大学人間発達科学部紀要第10巻第2号125～130（2016）

七木田方美著「保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響　COVID-19による影響調査」
比冶山大学短期大学教職課程研究　紀要論文　2021年3月

横井良憲・鈴木裕子著「新型コロナウイルス感染症COVID-19の中での保育施設の課題」
愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第6号P19～26　March.2021

「あそびと環境０・１・２歳」　学研　2022年1月号

Abstract

Human babies are born in a state of immaturity.While most mammals are able to stand and walk immediately after their birth, humans are not able to walk until about a year later. The period from birth to three years of age is an important time of remarkable development in both body and mind.

Chapter 2 of the Childcare Guidelines for Nursery Schools states, "The development of infants is characterized by the remarkable development of senses such as sight and hearing, and motor functions such as sitting, hopping, and walking, as well as the formation of emotional bonds through responsive interactions with specific adults.

It has been more than two years since preschool education and childcare facilities undewr the new coronavirus began requiring caregivers to wear masks as a measure to prevent infection. Although masks are important to prevent infection, the author find it difficult to remember the names and faces of students who wear masks when the author first meet them. The author wonder how children as well as adults feel about caregivers who wear masks. Is there any impact on the children's various development including their interpersonal skills?

Based on the responses to the questionnaire from the caregivers at the affiliated preschools of the autor’s university, it became clear that the wearing of masks by caregivers makes it difficult for them to communicate with children because their facial expressions and mouths are hidden by the masks. As a countermeasure for the future, it is required that caregivers devise ays to communicate with childre